

新版
NEW EDITION

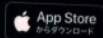
BASIC KANJI BOOK

—基本漢字500—

VOL.1
(第2版)

準拠アプリ(無料)

Basic Kanji Plus



Developed by
University of Tsukuba,
CEGLOC

CHIEKO KANO
YURI SHIMIZU
HIROKO YABE
ERIKO ISHII

BONJINSHA CO., LTD.

はじめに

本書は、非漢字系の学習者に漢字を少しでも効率的に、そして体系的に教えようという試みで作られたものである。筑波大学の留学生教育センターでは、1986年4月から「漢字学習研究グループ」を作り、パーソナル・コンピューターを利用した漢字学習プログラムの開発、実践、研究などを進めながら、漢字の何が難しいのか、どうすれば効率的に漢字の学習ができるのか、などを模索してきた。そのグループのメンバーが1987年秋に作成した『基本漢字の練習Ⅰ・Ⅱ』の試用版は、当センターの日本語コースで1年間使用してきたが、その使用結果を検討し、改訂を加えたものが本書である。

当センターの初級集中日本語コース(約500時間)は、関東・甲信越の国立大学に配置される文部省の研究留学生を対象に行われていた。学生のほとんどは、非漢字系であり、配置先の大学での研究活動に必要な日本語力を養成するというコースの目的を達成するためには、効率的な漢字教育が不可欠である。また、漢字を学習することによって、日本語そのものの運用能力が高まる、あるいは日本語的な認識方法ができるようになる、という利点もある。例えば、漢字の拾い読みによる連続であるとか、単漢字の意味から未習の複合語の意味を類推することなど、特に、中級・上級へと進む意志のある学習者にとって、漢字学習の効用は大きい。

しかし、これまでの日本語教育では、漢字の学習は個々の学習者の努力に委ねられるのが普通で、漢字の重要性、その習得の難しさにもかかわらず、漢字の教授法や教材の研究などが十分になされてきたとはいえない。語彙とともに一つ一つ辛抱強く書き取りをして暗記していくしかない、という旧態依然としたやり方では、途中で挫折してしまう学習者も多いはずである。

本書を作るに当たっては、まず漢字の難しさを次のように分析してみた。

- (1) 字形の複雑さ
- (2) 数の多さ
- (3) 表意性・表語性(アルファベットなどの表音文字とは違うという点)
- (4) 日本語の表記システムの複合性(ひらがな・カタカナとの併用)
- (5) 多読性・多義性などの特性

以上のような難しさを短期間に克服させるためには、ある程度理論的な説明も必要であろうし、また、「基本漢字」というような最小限の数の漢字を選んで、学習者にとりあえざるゴールというものを設定してやることも必要なのではないだろうか。単に主教材である文法や会話の教科書に出てくる言葉をやさしいものから順に漢字で教えるというのではなく、漢字の成り立ちを体系的に教えるとか、読解につなげるための語彙体系と結びつけて教えるとか、将来の漢字学習・日本語学習を効率的にするような基本単位としての漢字を教える姿勢がなければならないと思われる。また、日常よく見

る漢字も積極的に取り上げて、漢字学習の動機を高めることも大切である。せっかく漢字を苦勞して覚えても、日常生活に必要な情報が一向に得られるようにならないという苛立ちは、学習者を出口の見えないトンネルに追い込むようなものだからである。

本書の目的は、基本漢字 500 字を使って、学習者に

1. 漢字学習に関する知識(字源・表意性・音訓のルール・書き方・部首など)を体系的に教える
2. 漢字の運用能力(文脈からの意味の推測・複合漢語の意味構造の分析・漢字語の意味から文の意味を理解することなどを含む総合的な力)をつける
3. 覚えた漢字をいつでも必要に応じて記憶の中から取り出して活用できるような覚え方、思い出し方、整理法などを工夫させる

ということである。もちろん、学習させる 500 字に関しては、読み書きができるようにしなければならないことはいうまでもない。

基本漢字 500 字の選定に当たっては、上記の目的を達成するための効率を第一義に考えて、以下のような手順で決定した。

- ①漢字の成り立ちを教えるための漢字(象形文字・指事文字・会意文字など)を採用する。
- ②漢字力を読解につなげるために、主語・述語となる基本的な名詞、動詞、形容詞に使われる漢字を選ぶ。
- ③部首の概念を教えるために、基本的な部首として機能する漢字を選び、また各部首を持つ漢字がある程度数集まるように調整する。
- ④使用頻度や造語性が高い漢字を採用する。(学習研究社の『新しい漢字用法辞典』、国立国語研究所の『現代新聞の漢字』、および『現代雑誌九十種の用語用字』を参照した。)
- ⑤人名・地名の漢字や日常よく目にする表示の漢字については、500 字の枠外でも紹介する。

このようなわけで、500 字の中には、本当はその漢字自体が大切なのではなく、その漢字が他の漢字の要素となっているので、その漢字の書き方を覚えることで、他の多くの漢字が覚えやすくなるというようなものも含まれている。また、字源や部首を説明する際は、外国人にわかりやすいこと、外国人の記憶を助けるようなものであることが重要であると考えたので、本当の字源や部首とは違った説明をあえてしたところもあることをお断りしておく。

いずれにしても、学習効率というのは、実際に教材を使ってみた結果を重ねていかなければ結論は出せないものであるから、この 500 字の内容についても、さらに使いながら修正していくべきだと考えている。今後でもできるだけ多くの方々に使っていただき、ご意見、ご批評をいただければ幸いである。

本書の編集方針、500字の選定、学習内容の配列などは、漢字学習研究グループのメンバー4人が定例ミーティングで話し合い、検討し、決めてきたものであるが、当センターで教えている数多くの日本語担当教師からも、実際に授業で使用してみた上でのさまざまな意見・批評・助言などが出された。その先生方の体験、意見なども本書には大いに反映されている。それから、試用版から第2版までこの本を使って漢字を勉強した数多くの留学生たちから得た数々の貴重なコメントも忘れることはできない。

なお、本書の各課の学習内容の担当者は、以下の通りである。

加納千恵子	1、2、3、4、5、6、7、25、26、27、36、44、45
清水百合	11、12、13、14、28、29、30、33、41、42、43
谷部(竹中)弘子	8、9、16、17、19、20、21、24、34、35、37、38
石井恵理子	10、15、18、22、23、31、32、39、40

また、全体を通して、漢字の成り立ち・読み物については加納、部首・書き方については清水、形容詞・動詞および語構成については竹中、意味や場面による実用的グルーピングについては石井、というように分担して調整を行った。

1990年7月

筑波大学留学生教育センター
漢字学習研究グループ

加納千恵子	清水百合
谷部(竹中)弘子	石井恵理子

改訂にあたって

なお、2004年の改訂にあたり、『Basic Kanji Book』vol.1とvol.2の学習を終えて、『Intermediate Kanji Book』に進んだ学習者が参照する際の便宜を考え、巻末に「漢字番号順音訓索引」をつけた。本書は初級学習者を対象としているため、初級で扱わないような語の読みは載せていないが、巻末の新しい索引には、常用漢字表に載っている読みをすべて示してある。今後の学習に役立てていただければと思う。

2004年1月

著者一同

新版発行にあたって

1989年に『Basic Kanji Book』を世に出してから、25年の年月が流れました。この間、当初からの漢字教育の理念は全く変わっていませんが、いろいろな修正を加えてはきたものの、一部の内容や装丁、レイアウトなどに古さが目立つようになってきました。そこで、2015年を機に新版を発行できることになりました。これも、25年間の長きにわたり本書を愛用してくださった先生方、学習者の皆様のおかげと著者一同心から感謝しています。

新版では、レイアウトを一新しました。具体的には、学習漢字を見やすくするためにフォントを大きくし、イラストレーターの酒井弘美さんをお願いしてイラストを描きかえ、米国コロンビア大学の大学院生 Thomas Gaubatzさんに英語の部分のチェックを依頼するとともに、古くなった内容の見直しも行いました。また、海外で教える先生方や本書を自習する学習者のために、練習の解答例もつけてあります。

今後も、新版『Basic Kanji Book』が日本語の漢字学習の支援に役立つことを願ってやみません。

2015年4月

著者一同

本書の使い方

本書の内容は目次にある通りだが、各課の構成は次のようになっている。

各ユニット	内容
ユニット1	漢字の話 (漢字の成り立ち・部首・用法などその課の学習漢字に関する説明)
ユニット2	基本漢字(各課 10 字～12 字) 2-1. 漢字の書き方 2-2. 読み練習 2-3. 書き練習
ユニット3	読み物(11 課以降)
知っていますか できますか	役に立つ漢字情報やゲームなど

本書は一応各課を約 60 分の授業で使うようにデザインされているが、各教育機関、各学習者の実情に応じて、適宜工夫してほしい。

ユニット1

ユニット1は、漢字の体系的学習を助けるための基本的な学習項目と思われるものを、「漢字の話」として1課分ずつの長さ(1～2ページ程度)にまとめたものである。漢字の字源、成り立ち、部首など、いわゆる漢字というものを紹介するための説明のほかに、形容詞・動詞の送りがなのルールであるとか、動詞の用法による分類(スル動詞・移動動詞・変化動詞など)であるとか、言葉の意味による分類(位置・家族の名称・専門分野・季節・経済・地理など)や場面による分類(旅行・結婚・試験・生活など)、漢字の接辞的用法や語構成の説明など、さまざまなものが含まれている。これは、このような知識や整理法が学習者の漢字運用力の向上に有効であると考えからである。説明は、英語(後半は、やさしい日本語)やイラストになっているので、学習者に予習として読んでこさせることができる。教師は、クラスの初めの部分でその内容について質問を受けたり、学習者と話し合ったり、簡単なクイズがついている課ではそれを使ったりして、学習者がその課で学ぼうとしていることを理解しているかどうか確認する。時間にして、10分～20分程度(学習者が予習で十分理解できていれば、軽くふれる程度でもよい)であろうが、ここで学んだことが、後に学習者には、その課のメインテーマとして記憶に残り、その課の漢字を思い出すときの助けとなるはずなので、教師はできるだけ

さて、1課から10課までは、クラスで丁寧に漢字の書き方を指導してほしいので、2-1に20分程度、2-2と2-3のⅠの部分に合わせて20分程度をかけ、Ⅱの部分は宿題として翌日チェックする。11課以降は、2-1と2-2、2-3のⅠの部分は予習させてきて、朝提出させたものをクラスの前にチェックして返すようにする。クラスでは、間違っていたところを指摘するにとどめ、2-2のⅡ(文の読み練習)やユニット3の読みものに重点を置くようにしていく。書き練習のⅡ(改訂版では、21課以降にⅢとして応用練習もつけてある)は宿題にしてもよいし、学習が遅い者には、負担を軽くするために飛ばすこともできるだろう。漢字を書くスピードは個人差が大きいし、またその必要度もまちまちであることが多いからである。

漢字のクラスを担当する教師は、その課の漢字カードや単語カードを準備していく必要がある。フラッシュ・カードとして、手際よく読み練習をさせるために使うばかりでなく、カードの漢字を組み合わせる言葉を作る練習をしたり、部首ごとにグループ分けをする練習をしたり、時間があれば、単語カードで口頭作文の練習をするなどいろいろ工夫できる。なお、練習や宿題で漢字を書かせる時には、できれば本書に直接書きこませないで、漢字練習用のノート(小学生用の国語ノートでもよいが、ファイル・ノートやルーズリーフ・ノートが提出させる際に便利)を使わせることが望ましい。そうすれば、学生は本書を見ながら何回も繰り返し練習できるからである。

ユニット3

11課以降にはユニット3として、読み物をつけた。はじめのうちは、語単位の読みから文単位の読みへ、さらに既習漢字を使ったやさしいストーリーの展開の読みへと、徐々につなげていくことを意図したものが主だが、後半は、できるだけタスク型の読み物を増やすように努めた。1語1語を追って全部を完全に理解しようとするのではなく、与えられたタスクを解決するのに必要な情報だけを拾って読む、あるいは全体の意味を大きくつかみながら速く読む、など本当の意味での読みの作業に近づけることにより、読解力を養成することを目指したものである。だいたい15～20分で読み、設問をこなせることを目安に作ってある。学生が少しでも読む楽しみを味わってくれればと願って作ったものである。

このセクションは、いわば番外編のようなものなので、毎課必ずやる必要はなく、時間に余裕のある時に使えばよい。復習の日などにすることもできるし、これを題材に会話のクラスなどに発展させる、などいろいろな使い方ができると思う。興味があれば、学生が自分で読んでいくこともできるだろう。5課ごとに、復習・整理のページが入れているので、知識の整理に活用してほしい。宿題として提出させてもよい。

さて、以上は1989年当時、当センターでの75分授業(うち60分を本教材に、のこり15分を主教材の漢字の読み練習に使う)を想定して作った教案であり、初級コースでは、以下のように1日1課のペースで授業が進められていた。

1コマ目(75分): CAIによる文型・文法チェックと漢字の読み練習

(予習の確認および質問受付の時間)

2コマ目(75分): 口頭ドリル

3コマ目(75分): 会話練習

4コマ目(75分): 漢字練習・読解練習

4コマ目の漢字練習・読み練習の時間は、75分全部を本書に使っているのではなく、15分程度を会話教科書に出てくる漢字語彙の読み練習に使い、残りの60分程度を本書を使った体系的な漢字練習および読解指導に当てている。このように、他の主教材との併用も可能であるから、実際のクラスの実情に合わせていろいろな使い方を工夫していただきたいと思う。